

「ゆりの樹幼稚園の教育は 五感力を育てる」その1



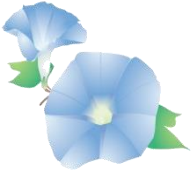
学校法人 高杉学園 学園長 高杉美稚子

平成25. 26年度と2年間をかけて、いつも、ミセスカレッジでお話ししている内容について掲載してきました。今年は、斉藤 孝先生と山下 柚美先生の著書『五感力を育てる』を題材として、「ゆりの樹幼稚園の教育は五感を育てる教育であること」をお伝えしたいと思います。

以下、『五感力を育てる』の目次に沿ってお話を進めます。
「少し小さい青の太い文字」で示したところは斉藤 孝先生と山下 柚美先生の言葉をそのまま引用させて頂き、実線「—」は文章中略です。

斉藤 孝先生のプロフィールは、東京大学法学部卒、東京大学大学院教育学研究科学校教育学専攻博士課程満期退学。日本学術振興会特別研究員、慶應義塾大学非常勤講師、明治大学文学部専任講師・助教授を経て現在は日本の教育学者、作家であり、明治大学文学部教授として活躍されておられます。

2001年には、『身体感覚を取り戻す』で新潮学芸賞を受賞。教育スタイル論の提唱者として知られ『声に出して読みたい日本語』（2001年、草思社）が250万部を超えるベストセラーとなり、同著で毎日出版文化賞特別賞受賞。その後、専門の教育学、日本語教育学などの書籍からビジネス書、コミュニケーションを基礎とした関連書籍を多数執筆されております。



ご専門は教育学、身体論。教育というものを広くとらえるために、日本語の言語能力やコミュニケーション能力、健康法など扱うテーマは多岐にわたり、身体を基盤とした心技体を持論とされ、三色ボールペンを用いた読書・情報活用法や、読書文化の重要性なども提唱されておられます。

その教育論は、本来の専門領域である教員養成以外にもビジネス現場や日常生活など、広く万人にも通じるように提唱されており、提唱する教育論やビジネス論・身体論などは、総合して「**齋藤メソッド**」と呼ばれています。

テレビ番組では、日本テレビ『世界一受けたい授業』に講師として出演の他、NHK Eテレ『にほんごであそぼ』、フジテレビ『ガチャガチャポン!』の企画・監修を担当。TBS『情報7days ニュースキャスター』ではレギュラーコメンテーターとして出演され、またTBS系平日朝の生放送報道・情報番組『あさちゃん!』に番組開始の2014年3月31日から2015年3月27日まで、メイン司会を務めておられますのでご存じの方も多いのではないかと思います。

一方、山下柚美先生は日本のノンフィクション作家、五感生活研究所代表。東京都生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。1994年『ショーン』で第1回小学館ノンフィクション大賞優秀賞。五感などをテーマに取材・執筆されています。元環境省「感覚環境のまちづくり」検討委員、江戸川区景観審議会委員、放送大学非常勤講師でもあります。



主な著書には、五感喪失（文藝春秋、1999.11.） 五感の故郷をさぐる（東京書籍、2001.5.） 五感生活術 眠った「私」を呼び覚ます（2002.4、文春新書） 〈五感〉再生へ 感覚は警告する（2004.9、岩波書店） 脳がいきいき「五感力」の磨き方（2006.11、健学社） 五感力を育てるワークブック 触る・聞く・味わう・嗅ぐ・見る楽しく感じる50のメソッド（2007.2、東山書房） 五感のチカラ（2012、福音社）などがあり、五感に関してのエキスパートであり、どこかで本を手にとられている方も多いと思います。

今回の本は、五感をテーマに取材と考察を重ね、それについての著書も多い山下 柚美さんと身体文化を実践しながら研究してきた私（斉藤）が、それぞれの立場から身体と感覚の問題にアプローチし、いかに五感力を取り戻し鍛え上げていくかを論じ合ったものです。

お二人の著書はいくつか読ませていただいておりますが、このお二人が一緒に本を出されていることが大変興味深く、2002年の本ではありますが、この本を参考文献として、今年度の巻頭言を進めていこうと思います。

又、少し気軽に読みやすくするために今年度から巻頭言は4ページに致します。



今年の巻頭言で書きたい『五感力を育てる』とゆりの樹幼稚園が考える教育の大切なこととの関連は、『声に出して読みたい日本語』でも述べてあるように、声を出して、しっかり呼吸することで、身体に芯が通ったような中心感覚を言作りたいという斉藤先生の願いと同じ考えです。

ゆりの樹の教育は、五感を大切に、脳を刺激し活性化すること・・・まずは、いつも園児達に言っている合言葉「目で見て・耳で聞いて・心で感じて・体で表しましょう」です。

いつも、感覚を鋭敏にして、自分の元気になる姿勢・呼吸に気づくことです。

そして、肯定的な言葉を使い、どんなことにも感謝して、楽しみ

『安心・安全な人的、物的環境の中で感動すること』

・・・これが一番大切です。私達大人も同じです。



見えることでは一背中を伸ばして、顔の向き、目線、肩のはりぐあい、手の動き、自分の足がこの地球とつながってスクッとたっている感覚をもつようにしましょう。鏡を時々、チェックしましょう。そのときに自分を励ます言葉をいみましょう。

幼稚園では、体を動かすことの大切さと同様に、じっとして、自分の姿勢と呼吸に気づくこと、そして、心と体が健康になるように、「人の良い所に焦点」を当てて、「ありがたい感謝の心」、「ごめんなさいの謙虚な心」「わからない、教えて、助けてが言える正直な心」が見えるように行動しよう、

優しさや思いやり、心が一つになっていることがわかるように、表現しようということを大切にしています。これが「ゆりの樹幼稚園が目指す人間像」です。

聞こえることでは一いいね、すてきだね、大好きなど、感じたことを素直に表現しましょう。

「～しないでね。」ではなく、「～してね。」と否定語ではなく肯定語を使って表現しましょう。受験生の話で、『受験票を忘れないでね』というと忘れる確立が高いそうです。そのときは『受験票は必ずもって行ってね』と肯定的に言う方が効果的です。

幼稚園では、『心の教育』の中で、子ども達の感情、心情の動きに問いかける肯定的な言葉かけをしています。

これが「ゆりの樹幼稚園で大切にしている、

愛と夢と希望と勇気がわく、輝く、元気が出る、喜びの言葉かけ」です。



感じることでは一深呼吸して、呼吸、顔の表情はどうなのか、感じていましょう。自分が今、何を考え、何を感じているか、どうしたいのかに気づいていましょう。

ボディランゲージ、アタッチメント行動を大切にしましょう。何事もまずは、受け止め、すべて包み込んで笑って許しましょう。怒り続けていると、怒りでいつまでもそのこと、人から縛られてしまいます。

自分から怒りを解いたとき、自分が自分自身から自由になれるのです。自分を偽っている限り、自分を好きになることはできません。自分の感情に気づくと正直になれます。

そうすると、心から楽しむことが出来、本当に感動できるのです。

幼稚園では、今、どんな気持ちで、この行動をしようとしているのか、してしまったのかを感じ、表現できる、そこからともに感動できる行動へ変化すること(エクステンジ)が出来る言葉かけを取り入れています。

これが、「ゆりの樹幼稚園の1OE」です。

以上のように、身体感覚、つまりは下記のように斉藤先生がおっしゃっている「五感力」を大切にしたい教育を実践しています。

感覚は、一つ一つの感覚が優れていればいいというものではありません。肝心なのは、それらの感覚を統合して、自分のものとして感じられることー(中略)ーこれを五感力と使っています。

ー(中略)ー五感力はかつては誰しもが持っていたものです

—（中略）—ところが今の私達の生活は画面を通しての情報を中心です。—（中略）—子ども達の遊びの内容も変質し、かつて、五感力をはぐくんできた環境は次々と失われています。今、五感力は確実に衰えています。

だからこそ、ゆりの樹幼稚園が考える「目指す人間像」や「ゆりの樹幼稚園で大切にしている、愛と夢と希望と勇気がわく、輝く、元気が出る、喜びの言葉かけ」「ゆりの樹幼稚園の10E」が今の時代こそ必要なのです。

そして、ゆりの樹の教育の循環「自己選択→決断→承認→自信→自他分離→個別性→共感→自立」の教育の循環を通して、真に自立し、自分の事が大好きな子ども達を育てていく「自分が大好きで、自分が信じられる」教育が求められているのです。

ゆりの樹幼稚園の自分で決断できるための教育の循環
これこそは人間の源になるものだからです。



五感力は弱くても日常生活は一見何の支障もなく送れているかのようです。しかし、実は大変な不安感とかコミュニケーションの不全を引き起こしています。五感力がないということは、間隔を統合して、現実をリアルなものとして感じ取る回路がうまく機能していないこと、「この世界は確かにある」「他者は確実に存在している」「自分の身体は確かなものだ」そう感じられるのが現実感です。その現実感がなければ自分の存在も希薄なものになります—（中略）—他者を自分の身体でリアルに感じれるかどうかはコミュニケーションの重要なポイントです。—（中略）—これからは、意識的に五感力に関しての経験を蓄積していく必要があると考えます。

その体験、体感教育がゆりの樹幼稚園の感動の教育であると考えます。



感動することの重要性については下記の

★ゆりの樹幼稚園で目指す教育の三つの柱★ のひとつです。

- 1に「真の自立への道」（個別性と共感）
- 2に「知ることの喜びを与えること」（自己成長の継続と問題解決能力）
- 3に「感動と思い出を作ること」（生命の尊重と危機管理能力）です。

そしてこうもいってらっしゃいます。日常、取り立てて問題にならない五感力が社会ではもっとハイレベルで要求されるのです。かつての子ども達は、社会に出ても、遊びや地域の人たちとのかわりなど、子ども時代に身に着けた感覚で、社会に出ても、コミュニケーションを自然に成立させてきました。ところが—（中略）—今は閉じた世界で、—（中略）—求められる能力はどんどん高くなっているのに

—（中略）—そのギャップの激しさを露呈しているのが今の子ども達の現実です。

—（中略）—五感力の欠如による障害がはっきり表に現れている人達と同じ課題を、実は多くの人が抱え、子どもが成長する場面でも、成人した後も、また親となって子育てをする場面でも、隠れた形で進行している。

だから、ゆりの樹幼稚園が考える三つの教育の根幹が大切なのです。

- 1、**共育**—自立への援助として、子どもと同じ目の高さになって、同じ純粋な心をもって、子どもを取り巻く教師が、保護者がともに育つ「共育」、
- 2、**響育**—感動と思い出を持って心と心が響きあう、子ども同士、大人同士、子どもと大人が、それぞれが 問い掛けたことがかえってくるそんな「響育」
- 3、**驚育**—知ることの喜びは、驚きと発見の連続を育てる「驚育」でありたいと考えます。

子育ては「親育て」。私達は子どもを育てるプロセスの中で、真の大人に、親に、人間になっていくのです。最初から立派な親はいません。子育ての中で悩み、傷つきながら、失敗から学んで、繰り返しの中で、親として成長していくのです。私は、**失敗しない人はチャレンジをしていない人** **だろう**と思います、新しいことにチャレンジすれば失敗はつきものです。失敗したらそこで学べばいいのです。

「育児は育自」なのです。このプロセスを大事にしないと、先月号でも書いた大人の5つの過ぎたるかわり
過保護・過干渉・過期待・過放任・過許可となって現れます。

この5つの過ぎたるかわりを打破する方法が「セルフコントロールできる子どもに育てることー自己決定能力のある子どもにすること」にあると私は考えます。そこで、決断の教育の循環が大切になってくるのです。

ここでも、ゆりの樹の教育の循環「自己選択→決断→承認→自信→自他分離→個別性→共感→自立」の教育の循環を通して、真に自立し、自分の事が大好きな子ども達を育てていく
「自分が大好きで、自分が信じられる」教育が求められているのです。

五感の中でも、特にこの本でテーマの一つになっているのが触覚の問題です。ー（中略ー）今の子ども達は産まれて以降、その成長過程においても、スキンシップの量が少ない、遊びの中での出会いが少ないなどの弱点をもっています。なおかつ、今、子育てをしている親自身、あまり触覚的に豊富な経験を経ないで育った世代が増えています。ー（中略ー）

問題は根源的であるけれど、悲観的でもありません。感覚は生活体験の中から育つものならば、子ども達に何をすればいいか、どんな体験を与えることが必要か、五感力を触覚という観点から見直すだけで何かが見えてくるー（中略ー）考え方も変わってくる。ー（中略ー）



この文章を読めば、なぜゆりの樹幼稚園が、こんなにも、世界中のおもちゃを集め、園児達に直に触れてもらう体感教育遊びを大切にしているかご理解頂けると思います。

又、あらゆる、その年齢に応じた適時適量の教育をプログラミングする体感教育の必要性も分かって頂けると思います。

そして、なぜこんなにも、園児達のお誕生日を大切にしているかも・・・それは、子ども達の誕生日であるけれど、我が子が生まれた、その日の感動を持ち続けて頂くことこそが、一番の子育てに必要なことであり、そのことを通して、子ども達は「親育て」をしてくれる、子育ての大切さを見つめなおす、親になった貴重な日としての我が子の誕生日であるからです。

我が子が生まれてくれたからこそ、親になることが出来、この感動を味わうことが出来、このゆりの樹幼稚園で出会い、人との輪でコミュニケーションが広がり(和)ご縁が繋がっていくのです。

「産まれてきてくれたことにありがとう」から出発したいものです。いえ、その前に結婚してくれてありがとう。それが、いつか生んでくれてありがとう・・・育ててくれてありがとう・・・に繋がります。だから、今ある当たり前のことに、そして、子育てで苦しいときも、その思いが親自身を育ててくれると思えば、それにも「ありがとう」ですね。

感謝の気持ちがあるところには、争いがありません。いつもどこにいても、何があっても『ありがとう』の気持ちを持ち続けるのが、子育てが、毎日が、人生が楽しくなる一番の処方箋かもしれません。

●感謝3段階●

○初級: 滅多にないくらい稀で嬉しいこと、ありがたいことに「ありがとう」と感謝すること

○中級: ごく当たり前のことに、自然に心から「ありがとう」と感謝すること

○上級(達人クラス): 一般的に言う都合の悪いこと、大変なことにも「ありがとう」と感謝すること

